

浄土真宗の宗風に沿った建墓の形式

浄土真宗の墓碑の建立には決められた固定的な形式（石の積み方や形・色・石質の規定）はありませんが、推奨できる形式を下記致しますので、ご参考の上、各位ご検討下さい。不明な点は本徳寺または所属寺のご住職にご相談下さい。

1. 角柱塔・六角塔が望ましい。

角柱塔は一般に使用されている四角柱状のもので、安定度も高く、耐久性に優れ、簡素で手軽に入手出来ます。六角塔（累宝塔）は屋根部のある六角柱状のもので、当廟所の名号塔がそれに当たります。これは複雑な形をしている為、加工に技術を要し、多少高価ではありますが、真宗のお墓としては最適であります。最近洋式台形（刻字は横書き）の墓石があります。これなどは重心も低く簡素で、價格的にも推奨出来ます。

2. 軸石の刻字は「南無阿弥陀仏」または「俱会一処」が好ましい。

「俱会一処 = くえいっしょ」とは『仏説阿弥陀経』にあるお言葉でお浄土へ生まれたものがすべて仏の境位にあって、共に会っていらっしやるということですし、合掌している我々もまた「俱に一処に会う」身であることを確認する事が浄土真宗の墓参です。

仏石の正面刻字に「 家之墓」「 家総墓」「 家先祖代々」等が一般的であります。家を限定的に刻字してしまいますと、将来いろいろな事情で使用出来にくいものになります。

3. 家名・家紋を刻字する場合は出来るだけ上台石の正面か、花立て石等に刻字するのが望ましい。

4. 故人の法名〔 釈 〕（戒名とは言わない）を刻字する場合は軸石左側面か法名碑に刻字するのが適当

将来、法名の列記が多くなるようであれば、当初より別に法名碑（石板）を横に設置されるのも一方です。また、法名碑の裏面には建立の経緯を記す事もできますし、石版の運搬が簡単な為、刻字の加筆が容易です。

「法名」とは本来、故人が生前に、本山等で帰敬式を受けたときに拝受する名称です。（葬儀に際して住職による代行の拝受もあります）教団の宗教事業の一環として帰敬式をみることは簡単ですが、「法名」自体はそれ以上に大切な意味を持っております。つまり、この世に生を受けたものが、「仏の教え」に出会って初めて人間を自覚し、「生死 = 迷い」を乗り越えていく活路を見いだす時に、「仏」と「法」（仏の教え）と「僧」（仏の教えに目覚め自己変革を成し遂げた人々の集団）に自ら帰依し、宗教的主体性を自覚的に確立するときにつけられる「名称」です。従って釈尊（お釈迦様）の弟子ということで、釈親鸞、釈蓮如、釈即如のように「法名」には必ず釈の一字が冠せられます。

5. 建立者名・建立年月日（吉日は不要）を刻字する場合は上台石の裏面に刻字するか、軸石の裏面の左隅に簡潔に刻字するのが望ましい。

特に表に名号が刻字されている場合、裏の記名は尊崇の意味から中心を外します。

6. 納骨に際しての写経収納について

納骨に際して、写経収納を行う風習がある処もありますが、その必然性はありません。遺族の方が発願して仏恩報謝の意味から行う場合は、『讚仏偈』『重誓偈』『阿弥陀経』または「正信偈」を一字一字読みとり味わいながら写筆して、粗末にならぬように、表具などして納めて下さい。ご法事の際には、御代前や床にかけて利用するのもよい事です。